

# 中国における少数民族の火文化に関する考察

## —彝族を例として—

張 貴 民

### 1. はじめに

我々の生活には火がなくてはならない存在である。食文化、酒文化、住文化と同じように、火文化も人文地理学の重要な研究対象の1つである。身近の生活における火の利用の仕方から、火についての理解、火にまつわる行事、火への信仰などまで、様々な課題がある。本稿は、中国における少数民族の火文化に関して、少数民族の彝族の事例からその内容を整理し、自然環境との関連からその地域的特性を初歩的に考察するものである。

### 2. 火と火の使用

火とは化学的には物質の燃焼に伴って発生する現象、あるいは燃焼の一部と考えられている現象である。

人類の祖先が最初に手に入れた火は、自然界に落雷や自然発火などによって燃えている木の枝などを住居あるいは洞窟に持ち帰り、火種として保存していたと考えられている。では、火の使用はいついつから始まったのか。考古学者はケニアのクービ・フォラにおいて、同じ地点でキャンプファイヤーが繰り返して行われると、下の土が15cmの深さまで酸化すること、火の下の土の磁気的な性質が変化することに注目し、世界最古(160万年前)のキャンプファイヤーの跡を同定した(ブライアン、2012、pp24-25)。

考古学者は1965年5月に中国の雲南省大那烏村附近で元謀原人化石(左右上内側切歯各1個)を発見し、古地磁気測定法を用いて測定したところ、絶対年代は今から約170万年前となった(呉・谷、1981、p128)。ヒトが火を使用した痕跡として焼かれた哺乳動物の骨なども発見した。また、北京市郊外にある周口店の遺跡から大量の木炭、灰、焼土塊、石、骨、エノキの種子等は北京原人がすでに火を用いることを知っており、また長期にわたる火の使用の経験を積んでいたことを示している(呉・谷、1981、p129)。

火の利用が始まってから、ヒトの社会文化は急激に

進化した。ヒトは火を利用して調理をし、暖を取り、焚き火によって夜を明るく過ごし、獣や害虫から身を守った。火を使った調理は、ヒトがタンパク質や炭水化物を摂取するのを容易にした。調理した食事は疾病を減少し、消化時間を短縮し、脳の発達に十分な栄養を提供できるようになった。また、火により寒い夜間にも行動ができるようになった。火を使って土器などの道具を作り、暮らしの質を向上した。また、火の利用は寒冷地までにヒトのエクメーネを拡大させた要因の1つであった。

### 3. 火と火の文化

人類は意識的に火種を保存し、さらに自力で様々な道具を工夫して火を起こしたことによって、火を制御できるようになった。

人類が火を起こす技術を発見したことは極めて古い時代までに遡ることができる。自然火ではなく発火法によって作り出した火は、人類の生活に革命的な変化をもたらした。火を手に入れたことは神話のように讃えられ、伝え続けられてきた。例えば、ギリシャ神話のプロメテウス、インド神話のアグニ、中国神話の燧人などがある。『尚書大伝』には次の記述がある。即ち、「遂人為遂皇、伏羲為戲皇、神農為農皇也。遂人以火紀、火、太陽也、陽尊、故託遂皇於天。伏羲以人事紀、故託戲皇於人。蓋天非人不因、人非天不成也。神農、悉地力、種稟疏、故託農皇於地。天地人道備、而三五之運興矣。」とある。古代神話には聖人として三皇五帝があり、三皇とは伏羲氏、神農氏と燧人氏の三人である。

『韓非子』五蠹篇<sup>1</sup>には、「民食果蓏蚌蛤、腥臊惡臭而傷害腹胃、民多疾病、有聖人作、鑿燧取火以化腥臊、而民說之、使王天下、號之曰燧人氏。」とある。燧人氏は初めて火を起こし、生ものを火で炙って熱すことで、生臭さを取り除き、食べ物による腹痛などの症状をなくさせた。このため、人々は燧人氏を尊敬し、王とし

1 中國哲學書電子化計劃 <http://ctext.org/hanfeizi/wu-du/zh>、最終閲覧日：2014年1月20日。

て推戴したという。

燧人氏の墓である燧皇陵は現在の河南省商丘市旧市街地から南西2kmのところにある。商丘市睢陽区では、火神台廟会が最も代表的な拜火崇火のまつりとして毎年行われている。睢陽区が中国民間文芸家協会に「中国火文化之郷」<sup>2</sup>として命名されている。火文化は地域観光の目玉として地域振興に役立っている。

一方、古代ギリシャやイスラム世界では、世界は空気・火・土・水の4つの元素からなる四大元素の説がある。また、古代中国に五行思想（五行説）という自然哲学の思想があり、万物は木・火・土・金・水の5種類の元素からなるという説である。その5種類の元素は互いに影響しあい、その生滅盛衰によって天地万物が変化し循環する。

#### 4. 漢字からみた火の意味

漢字は象形文字である。図1は火という漢字の変遷を示したものである。同図のAは甲骨文字の火で、火が燃えるさまを表したものである。この形を基本に、以降の「火」は変化してきた。Bは金文で、Cは秦の篆書で、Dは漢の隸書である。また、部首ひへん（れっか）のつく漢字は、『康熙字典』には炊・煙・炎・災・然・煮などを含めて536個にものぼる。火にまつわる文化の幅の広さを物語っている。

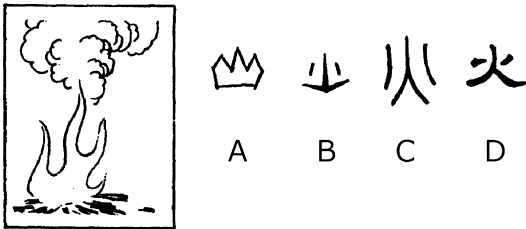


図1 「火」という漢字の変遷  
呉 (1994, p29) より

ここでは、「災」<sup>3</sup>という漢字を取り上げる。図2から「災」という漢字の変遷が分かる。甲骨文字の「災」（同図のA）は、家屋が燃えて被害を蒙ることを意味する。人間は火を手に入れた時から、火を制御し火災から身の安全と財産を守る努力が始まった。

また、生活範囲の拡大によって、川が堰き止められたり氾濫したりして水災となることを知り、同図のBのような「災」という字が作られた。また、古代部族

間の戦いも恐ろしい災害であった。兵災や戦災を表す同図のCとEは、戈という武器に頭髪をかけた様子である。一方、同図のFは水災と火災の両方を指すことが意味深い。現在、「災」は本来の火災より一般的に火・水・凶作・旱魃・戦争・動乱などによって齎された禍害を広く指し、例えば、火災・水災・災荒・旱災・戦災・兵災・天災・人災などの使い方がある(呉, 1994, p35. 陳, 2006, pp320-323)。

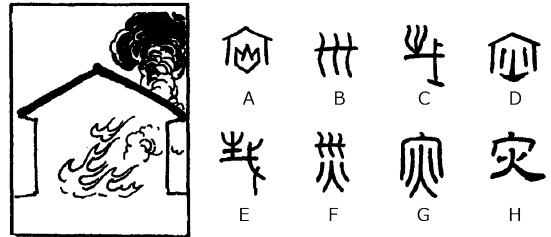


図2 「災」という漢字の変遷  
呉 (1994, p35) より

蛇足であるが、現在の消防局は本来の消火活動だけでなく、救急活動、そして交通事故や自然災害時に様々な救助活動も行なっている。「災」という漢字の成り立ちとどこかに共通する点があるように思う。

#### 5. 少数民族とその火文化

中国は56の民族によって構成されている多民族国家である。少数民族が最も多い地域として知られている内蒙古自治区・新疆ウイグル自治区・寧夏回族自治区・チベット自治区と広西壮族自治区の5つの民族自治区である。このほかに自治区と称しないが、数多くの少数民族が暮らしている青海省、貴州省、雲南省、遼寧省などの地域もある。

2010年に行われた第6回人口センサスの結果によれば、55の少数民族の人口は中国総人口の8.4%を占めている。表1に示したように、各少数民族は特定な地域に集中して分布する傾向がある。人口が1000万人を超える少数民族はチワン族・回族・満族とウイグル族である。人口が最も多いのは壮族の16,926,381人で、人口が最も少ないタートル族の3,556人である。

各少数民族は、多様な自然環境において、能動的に自然環境に適応し、それぞれの生業形態を確立し、独自の民族文化を形成してきた。火にまつわる文化もそ

2 商丘日報、2009年2月17日付。

3 「裁」は「災」の異字体である。

の1つである。表1に多くの民族に共通する伝統的な祭りである火把節<sup>4</sup>を示している。

雲南省の少数民族は、マクロスケールでは各民族が入り交じって混住しているが、ミクロスケールでは、各少数民族が集中して居住している傾向があり、それぞれの民族は自らの居住地域がある。そのため、互い

に文化的な影響を受けあう(張、2011)。四川省涼山彝族自治州の冕寧県では、チベット族は毎年の旧暦6月中旬に彝族の伝統まつりの火把節に参加して、楽しんでいる。また、雲南省の傣族は火把節を行わないが、芒市東郊外にある大湾村の傣族だけは、火把節を祝う習慣がある。

表1 各民族の人口と火文化にまつわる主な祭り

	民族(中国語)	民族(日本語)	主な分布地域	人口(人)	火文化
1	壮族	チワン族	広西	16,926,381	
2	回族	回族	寧夏、甘肅	10,586,087	
3	満族	満族	遼寧、吉林、黒竜江	10,387,958	
4	维吾尔族	ウイグル族	新疆	10,069,346	
5	苗族	ミョオ族	貴州、湖南、雲南	9,426,007	
6	彝族	イ族	雲南、四川、貴州	8,714,393	火把節
7	土家族	トゥチャ族	貴州、湖南	8,353,912	
8	藏族	チベット族	チベット、青海、四川	6,282,187	
9	蒙古族	モンゴル族	内蒙古	5,981,840	
10	侗族	トン族	貴州、湖南	2,879,974	
11	布依族	ブイ族	貴州	2,870,034	
12	瑶族	ヤオ族	広西	2,796,003	
13	白族	ベー族	雲南	1,933,510	火把節
14	朝鮮族	朝鮮族	吉林、遼寧、黒竜江	1,830,929	
15	哈尼族	ハニ族	雲南	1,660,932	火把節
16	黎族	リー族	海南	1,463,064	
17	哈萨克族	カザフ族	新疆	1,462,588	
18	傣族	タイ族	雲南	1,261,311	
19	畲族	シェ族	福建、浙江	708,651	
20	傈僳族	リス族	雲南	702,839	火把節
21	东乡族	トンシャン族	甘肅	621,500	
22	仡佬族	コーラオ族	貴州	550,746	
23	拉祜族	ラフ族	雲南	485,966	火把節
24	佤族	ワ族	雲南	429,709	
25	水族	スイ族	貴州	411,847	
26	纳西族	ナシ族	雲南、四川、チベット	326,295	火把節
27	羌族	チャン族	四川	309,576	
28	土族	トゥ族	青海	289,565	
29	仫佬族	ムーロオ族	広西	216,257	
30	锡伯族	シボ族	新疆	190,481	
31	柯尔克孜族	キルギス族	新疆	186,708	
32	景颇族	チンポー族	雲南	147,828	
33	达斡尔族	ダウール族	内蒙古	131,992	
34	撒拉族	サラ族	青海、甘肅	130,607	
35	布朗族	ブーラン族	雲南	119,639	火把節※
36	毛南族	マオナン族	広西	101,192	
37	塔吉克族	タジク族	新疆	51,069	

4 火把節は中国雲南省のいくつかの少数民族に共通した松明祭のことである。通常農暦6月24日か25日の前後の3日間に行われる。特に代表的なものはイ族と白族の松明祭である。火把節は、田畑から害虫を駆除し、農作物を保護して、豊作を祈る大変古い風習である。この晩、各家で松明を燃やし、全村の松明を集めた後、人々は焚き火の上を往復して乗り越え、魔よけをすることと災難を祓うことを火神に願うものである。現在、火把節が民族観光の目玉として雲南省各地で行われている。

(表1つづき)

	民族(中国語)	民族(日本語)	主な分布地域	人口(人)	火文化
38	普米族	プミ族	雲南	42,861	火把節
39	阿昌族	アシャン族	雲南	39,555	
40	怒族	ヌー族	雲南	37,523	
41	鄂温克族	エヴェンキ族	内蒙古、黒竜江	30,875	
42	京族	キン族	広西	28,199	
43	基诺族	ジノー族	雲南	23,143	火把節
44	德昂族	ドアン族	雲南	20,556	
45	保安族	ボウアン	甘肅	20,074	
46	俄罗斯族	ロシア族	新疆	15,393	
47	裕固族	ユウグ族	甘肅	14,378	
48	乌孜别克族	ウズベク族	新疆	10,569	
49	门巴族	メンパ族	チベット	10,561	
50	鄂伦春族	オロチョン	内蒙古、黒竜江	8,659	
51	独龙族	トールン族	雲南	6,930	
52	赫哲族	ホジョン族	黒竜江	5,354	
53	高山族	高山族	台湾	4,009	
54	珞巴族	ロツバ族	チベット	3,682	
55	塔爾族	タタル族	新疆	3,556	

※ ブーラン族の火把節は姑娘節とも言う。(人口は第6回中国人口センサス2010より)

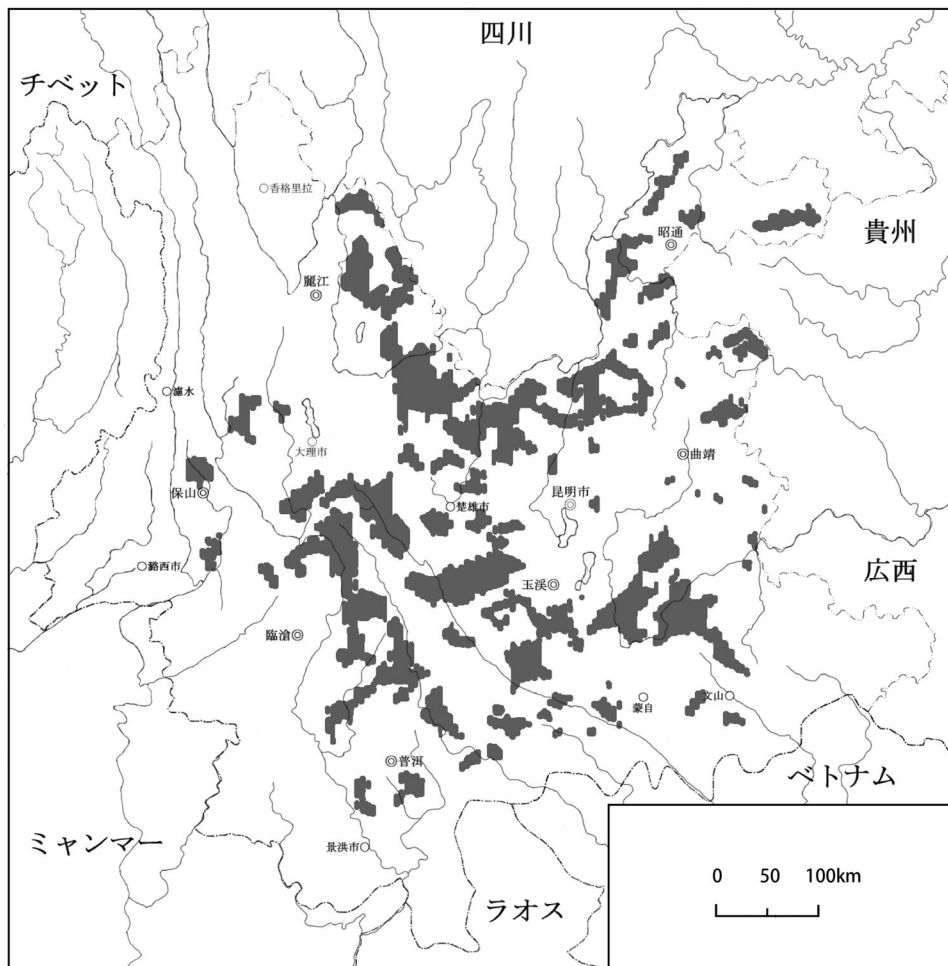


図3 雲南省における彝族の分布  
(『民族工作手冊』1985より作成)

## 6. 彝族の火文化

### (1) 彝族の分布

ここでは、雲南省の彝族<sup>5</sup>を事例として、その火文化をみてみよう。彝族に関しては、彝族の文化史と天文学・暦など研究した陳ほか(1984)、彝族の原始宗教とその文化を研究した朱(2002)、围炉裏文化に関する王(1998、pp247-316)などがある。

2010年の人口センサスによると、中国には8,714,393人の彝族がおり、主に雲南省(502.8万人)、四川省(178万人)、貴州省(84.3万)と広西壮族自治区(0.7万人)などに分布している。

雲南省には502.8万人の彝族が暮らしている<sup>6</sup>。行政区単位でみると、主に楚雄彝族自治州、紅河哈尼族彝族自治州、石林彝族自治州、江城哈尼族彝族自治州などの行政区に分布している。しかし、図3から彝族は雲南省のかなり広い範囲に分布していることが分かる。彼らの生活空間は主に海拔2500~3000mの山地にある。平地との温度差が大きく、冷涼な自然環境を生き抜くために、火は季節に関係なく一年中に必須なものである。

### (2) 彝族の歴史と生業

彝族は元々遊牧民族であった。彼らは水と草を求めながら移動していた。その後、四川省と雲南省大涼山と小涼山に定住して暮らしていた。定住後も主な生業が牧畜業であったが、農耕にも従事して、トウモロコシ・陸稻・イモ類などの畑作を耕していた。定住の初期段階に刀耕火種<sup>7</sup>(焼畑)を行っていた。彝族は典型的な「火の民族」である(黄、2010、p25)。なお、雲南省の刀耕火種については、尹・白坂(2000)が詳しい。

また、彝族は高山・中山と丘陵地域に暮らしているため、昼夜の温度差が大きい。そのため、彼らの生活は火塘(围炉裏)<sup>8</sup>とは切っては切れない関係にある。围炉裏は生活空間の最も重要な位置にある。家族は围炉裏の傍で話しあい、コミュニケーションをとる。围炉裏の火で食事を作り、围炉裏を囲んで食べる。そして围炉裏の傍で暖を取りながら寝る。火がなければ彼らの暮らしは継続できない(普・昂、2000、pp268-269)。

火の利用によって、まず農具の製造とその機能の改善が可能になった。農作業用の木の棒をあぶり、その硬度と耐久性を高める。また、竹をあぶり、柔軟性を

高めてから作業用の箴や箆をつくる。鋤、鎌、斧などの鉄製農具も作ることができて、農産物の効率を向上させた。

彝族の早期採集と狩猟経済においても火が使われた。また寒い高山牧草地で放牧する彝族の人々にとって、暖を取ったり煙草を吸ったり持参する昼飯を温めたりして火が欠かせないものである。

### (3) 彝族の信仰と文化

彝族の自然崇拜の中で、日月星辰、山川樹木、水火土石などがみんな崇拜の対象であり、それに相応した祭礼と禁忌がある。特に火への崇拜は彝族の生活と信仰のあらゆる面に浸透し、彼らの人生には火と切っては切れない因縁がある。出生の時は火に迎えられ、暮らしは火に伴い、死の時は火に送られる(陳、2002、p56)。

古代の中国人は、火には天火(自然の火)と人火(人工の火)の二種類があると認識していた。「人火曰火、天火曰災」、つまり、「人火」は日常暮らしに使う火であり、人々に幸せを与えるものである。一方の「天火」は自然界の火であり、雷による森林火災のような火災をもたされるものである。

彝族の祭火神辞には「火は雷神の火であり、火は雷から送られてきたものだ」と述べている。彝族の祖先は火のことをよく理解できなかった。火は生活になくはない存在だが、人々に災難をもたらす時もあると知っていた。したがって、彼らは火が靈性を持っていると信じられている。火は機嫌が良い時には人々の指図に従う。この時の火に「火靈」が宿る。

火は機嫌が悪い時には人々に災難をもたらす。この時の火に「火鬼」が宿る。こうして、「火靈」と「火鬼」の概念が生まれた(陳、2002、p56)。

山間部に位置する彝族の集落は、夏から秋までの間に大変乾燥しており、草葺の家屋がよく火事にあう。この季節に、彝族は集落から火鬼を追い出す(驅火鬼)風習がある。それと同時に、彼らは火神を祭り、平安と幸せを祈る。また雲南省路南の撒尼人(彝族の一部)の火神送り儀式は、火神を追い出すことから火神への敬愛へと変化を表している。人々にとって火神も邪悪で潜在的な脅威の一面がある。人々は集落の外

5 彝族の宗教と文化については、次の文献を参照されたい。朱文旭(2002):『彝族原始宗教与文化』、中央民族大学出版社、273p。

6 中国国家统计局 [http://www.stats.gov.cn/tjsj/tjgb/rkpcgb/dfkpcgb/201202/t20120228\\_30408.html](http://www.stats.gov.cn/tjsj/tjgb/rkpcgb/dfkpcgb/201202/t20120228_30408.html)、最終閲覧日:2014年1月20日。

7 刀耕火種は焼畑のことで、雲南省の少数民族地域では昔広く行われていた。彝族の地域では、原始農業経済以降、木(刀)耕火種の方法が採用され、「焚林而田」と呼ばれた最古の火耕法である。

8 このことを理解するため、沖縄の「火の神」を紹介した日本民俗建築学会(2010):『日本の生活環境と文化大事典』柏書房pp216-219を参照されたい。

までに火神を送ってから水でそれを消す。この儀式では、人々は火神に対して恐れており、無理矢理に火神を追い出すことはしない。火神に酒とご馳走を捧げて喜ばせてから、集落から送り出す（陳、2002、p56）。

火神は光り輝いて清潔であり、祖先神と保護神である。生まれ、老い、病と死は人間生活のすべて火と結びついている。火への崇拝は彝族の生活のあらゆる所で見る事ができる。中でも最も重要なのは囲炉裏の存在である。囲炉裏は家族の象徴であり、火の家である。家族は囲炉裏を囲んで寝食を共にするため、囲炉裏は祖先と子孫と精神的に交信する重要な場でもある。

金沙江兩岸に住む彝族の家は、囲炉裏に鍋を支える3つの石（鍋壯石）がある。左の石は男子青年を、右の石は女子青年を、そして上座にある石は祖先神靈をそれぞれ表し、子孫の繁栄を意味する。

自然界の火（天火）への畏敬から、囲炉裏の火（人火）への崇拝への変化は、火崇拝における重要な転換点である。火は神性を持ち、家族の守り神になる。そこで、火の悪の一面が消え、善の一面が顕在化している（陳、2002、p57）。

彝族の誕生礼・成丁礼・婚礼・葬礼など、どれも火と密接に関係している。小涼山では、彝族の男の子の成丁礼（ズボンを穿く儀式）が囲炉裏の傍で行う。母親が囲炉裏で熱した石に水をかけて、ズボンに水蒸気を浴びせてから、男の子に穿かせる。そうすると、男の子は成人になる。悪鬼を祓い、囲炉裏の神の加護を受ける。また、寧蒗県の結婚式では、花嫁は実家の囲炉裏の神に告別式を行ってから、その魂ははじめて新郎の家族の一員になれると信じられている。その時、囲炉裏の火は結婚式の証人になるのである（陳、2002、p57）。

また、彝族は娘の結婚式で、花嫁道具として娘に必ず次のものを持たせる。即ち、赤に染められた火鉢と火扇（火を起こす時に使う団扇）、そして赤い紙か赤い布で包んだ火箸と炭である。いずれも囲炉裏で使うものばかりである。赤は結婚する娘の幸福と健康を祈る意味がある（黄、2012、p29）。

一方、彝族の葬礼にも火が欠かせない。彝族は伝統的に火葬を行う。四川省や雲南省の彝族地域ではこの伝統が今でも残っている。『雲南誌略・諸夷風俗・羅羅』には「酋長死、以豹皮裹屍而焚、葬其骨於山。」とあり、酋長の葬儀の様子を記している。また、『宣威州誌』には「黒羅羅、死者覆以裙毡……（中略）……打牛、羊、猪以祭、三、五、七日举而焚之於山。」とある。さらに『永北府誌』には「身歿火化、収骨埋葬。」と記述している。いずれも火葬の様子について記したものである。彝族のルーツは古代羌人に遡ることができることから、彝族の火葬は羌人の葬式の方法に由来していると考えられる。

その羌人の葬式については『庄子・逸篇』には「羌人死、焚而揚其灰。」と記されている。さらに、『呂氏春秋・義賞篇』には「氏羌之民、其虜也、不憂其累累、而憂其死不焚也。」とある。これらの古文書から彝族の火文化の歴史を理解することができる。

## 7. おわりに

以上では、少数民族彝族の火文化を初歩的に考察した。特に火への崇拝は、彝族の生活のあらゆる面に浸透し、彼らの人生には火と切つては切れない因縁がある。出生の時は火に迎えられ、暮らしは囲炉裏の火に伴い、死の時は火に送られるという点で彼らを「火の民族」と称するのに相応しい。彝族にとって火は暮らしに必須な道具であり、畏敬し信仰する対象でもある。彝族の人々が火のために生きていると著者は思いたくなる。なお、この論文は日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）（課題番号20401043、平成20年度～平成22年度）「中国雲南省における少数民族地域の変容に関する人文地理学的研究」（研究代表者：張貴民）の成果の一部である。

## 〈参考文献〉

- 王立軍・毛文麗（2009）：漢字と古代火文化、中国教師、No.17、58-59。
- 王鵬渤（1998）：『中国地域文化叢書 滇雲文化』、遼寧教育出版社、380p。
- 尹紹亭著・白坂蕃訳（2000）：『雲南の焼畑：人類生態学的研究』農林統計協会、240p。
- 黄竜光（2010）：試論彝族火神話与火崇拜、毕節学院学报、Vol.28、No.1、25-31。
- 吳汝康・谷豊信（1981）：中国古人類学30年（1949-79）、人類学雑誌、Vol.89、No.2、127-136。
- 吳頤人（1994）：『常用漢字変遷図説』、上海書店出版社、118p。
- 朱文旭（2002）：『彝族原始宗教与文化』、中央民族大学出版社、273p。
- 陳永香（2002）：論彝族的火崇拜、楚雄師範学院学报、Vol.17、No.2、56-58。
- 陳久金ほか（1984）：『彝族天文学史』、雲南人民出版社、353p。
- 陳政（2006）：『字源談趣』、新世界出版社、401p。
- 張貴民（2011）：中国雲南省における少数民族地域の変化—花腰傣の村を事例として—、愛媛の地理、No.21、65-76。
- 普文芳・昂自明（2000）：彝族傳統歌場的文化生態研究、雲南彝学研究、No.1、雲南民族出版社、268-269。
- ブライアン・M・フェイガン編、西秋良宏監訳（2012）：『古代の科学と技術』朝倉書店、pp24-25。